

57 明治期ドイツ留学生の絵葉書

小田 皓 二

今世紀の最初の年に当たり、一〇〇年前のドイツ留学生が情報交換に利用した絵葉書を紹介する。

一九〇〇年前後は京都大学の開校、全国五つの高等学校医学部の分離独立などにより、例年より留学生が多かった。絵葉書を保存していた坂田快太郎は一八八七年(明治二〇)東大を卒業し、翌八八年に岡山の第三高等中学校医学部へ外科教授として赴任、二二年間教授を勤め、初代岡山県医師会長に推されていた。

一九〇〇年に、坂田は岡山県病院から初の県費留学生としてドイツへ派遣された。まずベルリン大学で、次いで現在はポーランド領のブレスラウ大学に学び、講習のためベルリンへ再三往復していた。当初は環境の激変と西欧人の濃厚なラブシーンなど、カルチャーショックから重い思郷病(ホームシック)にかかり、うつ状態になっ

ていた。

留学生仲間が坂田に宛てたドイツの絵葉書約四〇〇枚が残っており、印刷技術、色彩、デザイン、芸術性、奇抜さ等、いずれの面でも日本よりはるかに優れていた。カラーが多く差出人は東大と岡山出身者のものが多い。遠山嘉男氏は同じ時期に留学していた宮本叔の絵葉書約六〇〇枚を整理しており、五ペーニツヒで日常よく利用され、市内はわずか二ペーニツヒで即日配達されていたという。

簡潔なカタカナの候文が多く、小さな字で書かれた長文もある。内容は多様で到着、下宿、入学、転学、転居、大学の講義、研究、講習会、酒場、カフェ、玉突き、買物、お祭り、旅行、遠足、散歩等の近況報告や、年賀状、礼状、クリスマスカード、帰朝挨拶など様ざまである。寄書きあり、俳句、川柳、短歌ありドイツ語もある。言葉、食事、資金、論文、セックスなどの悩みや苦勞についての赤裸々な情報も見られる。読みやすいものから、達筆、悪筆、くせ字、変体がな、仲間以外には通じない略語、あだ名など、判読困難なものや差出人不明の葉書

もある。

坂田は留学二カ月後に家族へ「絵葉書がはや二百枚近くたまつた。独逸は絵葉書の流行する処でこつた品も多く、大分目がきき出して面白い葉書、つまらぬ葉書がわかるようになった。二年間に二、三千枚たまらるだろう。数が多いため同じ絵のものは来ない」と知らせている。

現在は情報化が進んで世界中と自由に交信できるが、当時はヨーロッパまで海路一カ月以上を要し、電報はあったが郵便も同じように日数がかかつていた。電話がまだ普及していなかったため、絵葉書は欠かすことのできない重要な通信手段であった。そのため電話代わりに盛んに利用され、留学生は絵葉書でお互いに情報を交換し合っていた。

絵葉書から当時の留学生生活の一端を伺い知ることができ。なれぬ異国の地で不自由とホームシックに耐えながら、限られた財布から、やがて各自が適当にストレスの発散法を見出していた。留学生は畏敬の眼で先進医学を学び、吸収に努め、使命感に燃えて懸命に勉強に励んでいたこともよくわかる。現在は情報化時代になって、

電話やファックスなどによる情報は、後世に残ることは少ないであろう。IT技術が発達し、個人が交わした情報は逆に残りにくい時代になったといえる。

絵葉書には、教授や帰朝後に教授になった人、新しく教室を創設した先人たちの名前が見られる。その中から東大教授になった千葉稔次郎、田代義徳、呉秀三、創設期の京大になった岡本梁松、中西亀太郎、松浦有志太郎、足立文太郎、吾妻勝剛らの諸教授や、のちに校長、学長になった高安右人(金沢)、筒井八百珠(岡山)、望月惇一(京都府立)、荒木寅三郎(京大)らの若き日の絵はがきを紹介する。

(医療法人おだうじ会 小田病院)